

S know O by sight の意味

——この by は〈手段〉か非〈手段〉か——*

平 沢 慎 也

1. はじめに

本稿の目標は、現代英語における慣習的表現である [S know O by sight] の意味を正確に記述することを通して、この表現において前置詞 by が果たしている役割を母語話者がどのように解釈していると考えられるかを論じることである。この表現が慣習化していること自体はよく知られており、英和辞典で提案されている訳語の候補や、英英辞典で提示されている意味記述はすでにかなり高いレベルに達している。(1) に2つの英和辞典が挙げる訳語候補と例文を、(2) に2つの英英辞典(ウェブ版)の意味記述を示す(「s.v.」は sub voce の略で、当該の辞書のどの項目からの引用なのかを示す)。

(1) a. *knów ... by sight*

働[㊤]〈…〉の顔は知っている

I know Mr. Smith by sight, though I've never spoken to him.

スミスさんとは話したことはないが、顔はわかります。

(『コンパスローズ英和辞典』 s.v. *sight*)

b. *knòw A by síght*

A〈人〉と顔見知りである、A〈人・物〉に見覚えがある

I know Chris only by sight, but I've never spoken with her.

クリスの顔は知っているが話をしたことはない。

(『ウィズダム英和辞典』第4版, s.v. *sight*)

(2) a. *know someone by sight*

If you know someone by sight, that person looks familiar to you, but is not a friend of yours (<https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/know-by-sight>)

b. know somebody by sight

to recognize somebody without knowing them well

(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/know_1#know_idmg_11)

(2) の意味記述における ‘but is not a friend of yours’ と ‘without knowing them well’ という要素は、(1) では明示的に説明こそされていないものの、例文の though 以降と but 以降の部分で捉えられている（また (1a) の訳語候補の「は」はこうした要素を暗示している）と考えられる。本稿は (1) (2) を否定するものではないことをあらかじめことわっておく。

しかし、母語話者が [S know O by sight] というフレーズ全体に見て取る意味が概ね (1) (2) に示されたようなものであるとして、そのパーツ——特に know と by と sight——はどのように理解されているのだろうか。know も by も sight も多義語である。母語話者は、[S know O by sight] というフレーズを発したり理解したりする際に、それぞれの語のどの意味を活性化させているのだろうか。

know と by と sight のうち、特に重点を置きたいのは by である。筆者の見限り、これまで辞書などで提示されてきた分析では、[S know O by sight] の by は〈手段〉の by であるという解釈と、〈手段〉の by ではないという解釈に二分化しているようである。果たしてどちらが母語話者の解釈を正しく反映しているのだろうか。結論を先取りすると、本稿は、[S know O by sight] の by は sight の解釈や know と by sight の関係の捉え方——by sight を know の複層的な意味のどの層に結びつけて理解するか——に応じて、〈手段〉の用法であるともそうでないとも考えられること、ひいては、具体的な表現における by に関して〈手段〉か非〈手段〉かという二項対立的な見方を持ち込むことには慎重になるべきであることを主張する。

以下では、まず、複合的な表現において構成要素（パーツ）が担っている意

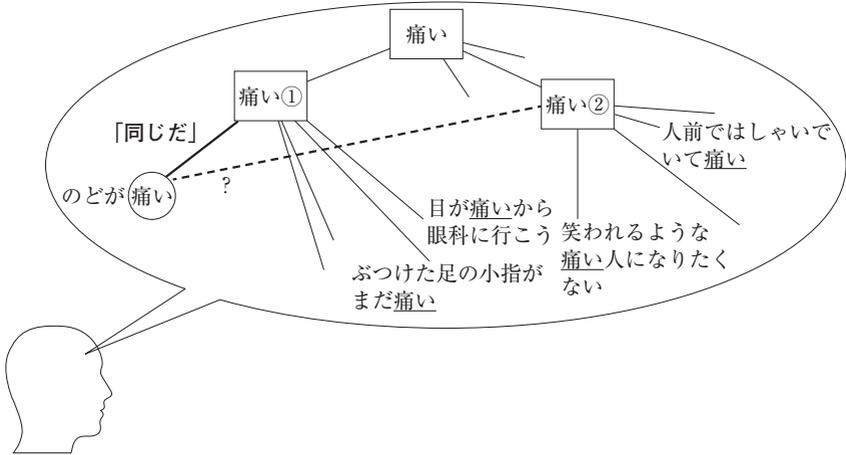
味についての筆者の立場を明確化する(2節)。続いて、その立場のもと、[S know O by sight] というフレーズの構成要素の意味を、sight の意味(3節)、know の意味(4節)、そして by の意味(5節)という順で論じていく。6節はまとめである。

2. 複合的な表現のパーツの意味

本稿では、複合的な表現の構成要素(パーツ)の意味は言語使用者(個人)による「リンク発見」(萩澤・氏家 2022) という動的な解釈プロセスを受けている、という立場を取る。この立場では、複合的な表現(仮に XYZ とする)におけるパーツ X の意味を問うことは、X が XYZ において担っている意味と、X が XYZ 以外の表現(XAB や XCD など)において担っている色々な意味のうちのどれとの間に、どのような関係が見いだされているか(どのようなリンクが発見されているか)を問うことに等しくなる。ここで言う、関係が「見いだされている」とは、その複合的な表現の使用者によって見いだされているということである。ある関係を見いだすかどうかは個人によって異なりうることや(同じ個人でも)時と場合によって変わりうること——複合表現におけるパーツの意味は話者の解釈の産物であること——を本稿は積極的・全面的に受け入れる。

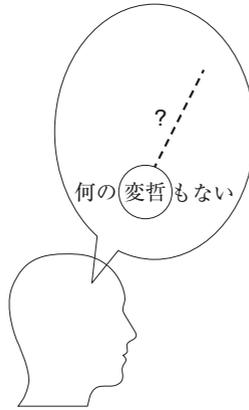
ここで、「のどが痛い」というフレーズにおいて「痛い」というパーツが担っている意味を考えてみよう。この「痛い」は、身体に物理的に生じるある特定の種類の感覚を指していると考えられる。「のどが痛い」の「痛い」と、「目が痛いから眼科に行こう」「ぶつけた足の小指がまだ痛い」などに現れるような「痛い」の意味との間に同一性の関係が見いだされているのである。一方で、「痛い」の別の意味(たとえば「あの、人前であんなにはしゃいじゃって、痛いよね」「笑われるような痛い人になりたくない」などに現れるような人物評価の意味)との間には同一性の関係が見いだされない(ただしごくごく微弱な類似性が見いだされる可能性はある)。図1では話者によって見いだされる(発見される)強固な関係(リンク)を太線で示している。

図1 「のどが痛い」の「痛い」の解釈



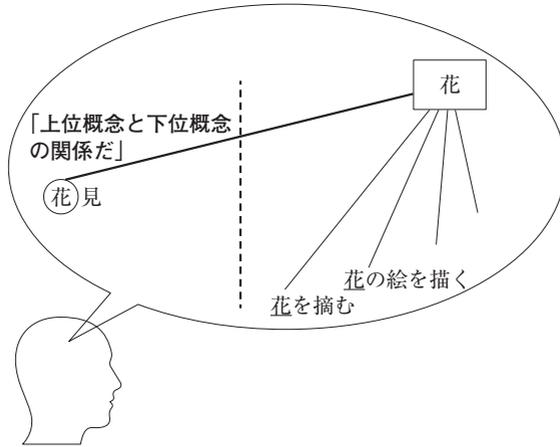
リンク発見がほとんど全くなされないのであろうパーツを含む複合的表現の例としては、「何の変哲もない」を挙げることができる(野中 2021)。「変哲」というパーツは、「何の変哲もない」以外には全く用いられない。「何の変哲もない」とは大きく異なる「今日のあいつちょっと変哲なところあるよね」のような言い方をしないだけでなく、「何の変哲もない」と非常に近いはずの「いかなる変哲もない」すら用いられない。そのため、この表現の「変哲」というパーツの意味を、「変哲」がほかのフレーズにおいて担っている意味とリンクさせて理解している、という話者は皆無であろう¹⁾。

図2 「何の変哲もない」の「変哲」の解釈



今度は「花見」という複合的表現の構成要素である「花」の意味について考えてみよう。「花見」以外の、たとえば「花を摘む」とか「花の絵を描く」とかいった表現における「花」の指示対象はコスモスやひまわりなど様々な種類を含む広い概念（上位概念）である。これに対して「花見」は特殊で、「花」の部分が指すのは桜（あるいはひよっとすと梅）という狭い概念（下位概念）である。この上位⇔下位の関係は極めて明白であり、多くの話者に見いだされている関係であると思われる。桜（または梅）を限定的に指す「花」が「花見」以外に見られないことを考慮して、「花見」限定の上位⇔下位の関係が見いだされていると言っておこう²⁾。このような点で「花見」が他の「花」フレーズとは異質であることが、図3では縦の破線で示されている。

図3 「花見」の「花」の解釈



ここまで見てきた例——つまり「のどが痛い」の「痛い」, 「何の変哲もない」の「変哲」, 「花見」の「花」——の場合には, 解釈に個人差や時と場合による差があるとは考えづらいが, 別の例を考えてみればこうした差はすぐに浮き彫りになる。たとえば, 「けりをつける」はどうだろうか。このフレーズが, 何かをしっかりと終わらせて再開や再発などが生じないようにすることを指し, 宣言の場面で用いられやすい (例: 「今度こそ, けりをつけてやる!」) ということを理解している日本語母語話者の個人個人が, 「けり」の部分をもどのように解釈しているかを考えてみよう (平沢 2021: 137-140)。まず, 「けり (蹴り) を入れる」や「格闘家になるにはけり (蹴り) が弱い」の「けり」とよく似ていると感じる人もいれば (図4の話者A)³⁾, そうでない人もいる。そうでない人の多くは, 「けりをつける」の「けり」を日本語に存在するいかなる表現とも結びつけていない (リンクを発見していない) だろう (図4の話者C)。ところで, 歴史的に言うとも「けりをつける」の「けり」は和歌・俳句の結びの助動詞である。歌の終わりに助動詞「けり」をつけるかのように物事を終わらせるというのがこのフレーズの由来なのである。したがって, 日本語のたどってきた歴史あるいは和歌・俳句に通じていることにより, 「けりをつける」の「けり」と助動詞「けり」との間に類似性を見いだしている人も (割合としては非常に少な

いだろうが) あるいはいるかもしれない (図4の話者B)⁴⁾。

図4 「けりをつける」の「けり」の解釈 (話者A—C)

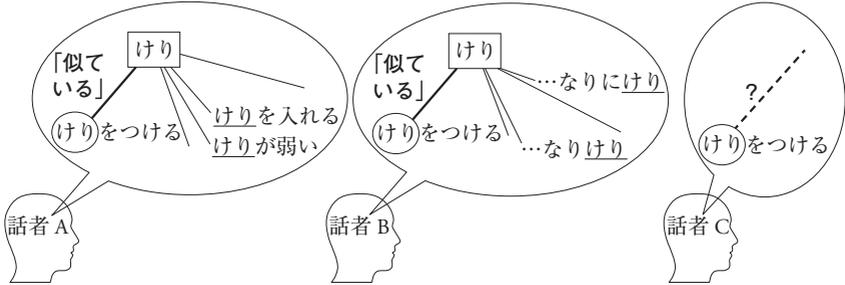
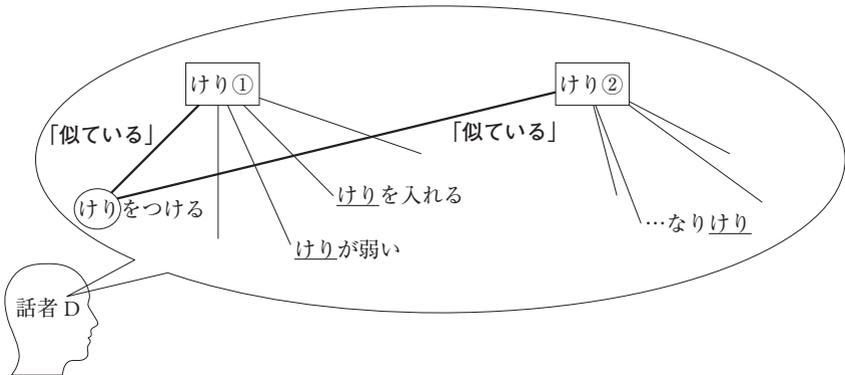


図4では話者Aと話者Bを別の話者と想定しているが、同一の話者が「けりをつける」の「けり」を「蹴り」と助動詞の「けり」の両方に似ているものと認識している場合もあるだろう (図5)。

図5 「けりをつける」の「けり」の解釈 (話者D)



ここで重要なポイントは、話者A—Dのどのタイプの人でも、「けりをつける」というフレーズ全体の意味理解や使い方という点では概ね一致しているということである。慣習化した表現を、他の母語話者たちと同じように使えるようになるためには、その表現全体の意味・用法の理解が他者と概ね揃っていればよいのであり、パーツ分解的理解に関しては大きく異なる複数の仕方がありえる

のである⁵⁾。

以下では [S know O by sight] というフレーズにおける sight の意味, know の意味, by の意味をこうした意味観に立って議論していく。この立場では, たとえば [S know O by sight] における sight の意味を問うとは, すなわち, [S know O by sight] の使用者がこのフレーズにおける sight の意味と, 他の表現における sight の意味との間にどのような関係を見いだしているかを問うことに等しくなる。そして, ここには唯一絶対の「正解」があるわけではなく, 個人によって, また時・場合によって異なりうることを考慮し, 必要に応じていくつかの可能性を検討することになる。

3. sight の意味

本節では, 上記のような意味観を前提として, [S know O by sight] を構成するパーツの 1 つである sight の意味について議論していく。先取りして言えば, このフレーズにおける sight の意味を, sight が他の表現において持ついくつかの意味のうちどれとどのように結びつけて理解するかには, 大きく分けて 2 通りのあり方が考えられる。

3.1. sight に対する解釈①

まず注目したいのが, [S know O by sight] の慣習的な使い方の 1 つに次のようなものがあるという事実である。

- (3) a. I **know** her **by sight** but not by name. [=I know what she looks like but I don't know her name] (<https://www.britannica.com/dictionary/by>⁶⁾)

その女性の顔は知っているが, 名前は知らない。

- b. Jessica Southwell **knew** the Harrisons **by sight**, not by name. She saw them at parent-teacher conferences, at the grocery store and on the street.

(<https://www.seattletimes.com/seattle-news/orting-mourns-5-children-slain-in-graham/>)

ジェシカ・サウスウェルにとってハリスンさん一家は見知った顔。

しかし名前は知らなかった。PTA の会合やスーパー、道で見かけるくらいだったのだ。

- c. It's possible they **know** him **by sight** rather than by name as he is a long-established Hertfordshire resident.

(<https://www.whitimes.co.uk/news/22296420.photo-man-found-dead-brookmans-park-released/>)

名前は知らなくても顔ならわかるという可能性はあるんです。ハートフォードシャー在住歴が長い人だったので。

- (4) a. I **know** her by name, but not **by sight**.

彼女の名前は知っているが顔は知らない

(『ジーニアス英和辞典』第6版, s.v. *by*; 日本語訳も原文)

- b. I was never famous, of course; I was **known** by name, not **by sight**, and after twenty years of this invisible notoriety [...] I let even my name pass into obscurity.

(Robert Ayres Carter, "Bunyan")

無論わたしは人々に知られるような人物ではなかった。名前は知られていたが、見た目でわたしと分かる人はいなかった。かくが如く目に見えぬ名ばかりの存在として20年を過ごしたのち [...] その名前すら世に埋もれさせてしまった。

- c. Most people in Blanco **know** Renee Benson, 59, by name rather than **by sight**. "When you say the name 'Renee Benson,' everyone knows who you're talking about. But I wouldn't even know her if she walked in right now," said Lesley Griffin [...].

(https://www.nola.com/sports/saints/who-is-renee-benson-in-blanco-texas-as-in-new-orleans-the-answer-is-unclear/article_2e1916e8-ef92-5115-9985-14e523a5e1e4.html)

ブランコの人々の大半はレニー・ベンソン 59 歳の名前は知っているが、見た目は知らない。「レニー・ベンソンの名前を出せば、誰の話かはみんなわかってくれます。しかし、もし今この瞬間ここに入ってきて、私はそれがレニー・ベンソンだとわからないでしょう」とレズリー・グリフィンは言う [...]。

これらの例では、[S know O by sight] が、[S know O by name] と対比されている。そして [S know O by name] の name は、明らかに、O の name を指している。このような対比用法が慣習化していることを考えると、[S know O by sight] の sight を (name を O の名前と解釈するのと同じ要領で) O の sight だと解釈している話者は数多く存在するだろうと考えられる。

「O の sight」の sight とは、「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」である。実際、以下の英英辞典では、by sight と know by sight の定義文 (5) (6) の中で looks と appearance という見た目を指す名詞が用いられている。

(5) on the basis of one's looks (<https://www.merriam-webster.com/dictionary/by%20sight>)

(6) to be familiar with the appearance of without having personal acquaintance

(<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/know-by-sight>)

(なお、議論の先取りになるが、こうした解釈をしている話者は、by を「…することによって」という〈手段〉義で捉えている可能性と、「…に関しては、…の点では」という非〈手段〉義で捉えている可能性の両方が考えられる。詳しくは5節参照。)

ここで、筆者が「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」という記述で何を意図しているのかを2つの観点からもう少し具体化しておきたい。まず、「属性」という表現を用いることによって、[S know O by sight] の sight 「(O の) 見た目」がSにとっていつもも見えている見た目に限られるということを示しているつもりである(ここでの「いつも」は「日常的に、普段、基本的に」程度の意)。たとえば、しばらく通っているバーで何度も見かけた客について I know him by sight. といった場合、その sight は当該の客がいつもどのような見た目であるか(どんな顔であるか、目立って背が高かったり太っていたりするか、服装にどんな傾向があるかなど)を指すのであって、ある特定の日の夜にどのような見た目であったかを指すのではない。また「いつも」とは言ってもバーに来店していないときの格好(たとえば毎晩どんなパジャマを着て寝ているか)はこの sight に含まれない。「いつも」というのはあくまでもSとOの関係性の中での「いつも」なのである。以下の例は銃撃事件が起こった船に乗っていた密航者たち

に関する刑事（から別の刑事へ）の発話である。

(7) Turns out they only **knew** the shooter **by sight**. (映画 *Lethal Weapon 4*)

密航者たちにとって犯人は顔しかわからない奴だったみたいです。

この場合、犯人の sight「見た目」に、顔や背格好など明らかに安定性のある正真正銘の「属性」に加えて、船旅の間だけの一時的な服装が含まれる可能性がある。これは、そもそも密航者と犯人の関係性それ自体が、一時的に船旅をともにしたというだけのものにすぎないためである。密航者からしてみれば、他の日に犯人がどのような格好をしているのか知らないのだから、この事件時の犯人の格好は、密航者と犯人の関係の中で言えば「いつも」の格好であり、本稿の言うところの「属性」にあたるのである。

このことに関連してもう1つ、「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」という記述に関して具体化しておきたいのは、[S know O by sight] の O が人間である場合、sight「(Oの) 見た目」は特に「(Oの) 顔」と解釈されやすいということである⁷⁾。これは、顔は人間にとって背格好と同じく変わりにくい特徴であること、そして、背格好よりも個人差が大きいため目立った特徴であることにより、「属性」として機能しやすいためであると思われる。本稿では、[S know O by sight] は O が無生物であっても用いられる場合がある（たとえば単語を目で見て「この単語はあれだ」とピンと来ることができるだけの知識・能力を持っていることを know words by sight と表現できる）ことを考慮して、「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目・顔」のような記述の仕方は避けることにするが、O が人間である場合には sight が顔と解釈されやすいことを積極的に認めている点に注意されたい。

さて、ここまでは、[S know O by sight] の sight が「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」と解釈されうることを指摘し、「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」とはどういうことかを明示化してきたが、しかし、誰か・何かの持っている属性としての見た目のことを sight という語で指すのは、[S know O by sight] 以外ではそう一般的でない⁸⁾。以下、* (アスタリスク) が

付された例文は不自然な例である。

- (8) a. a young man with a handsome {face / *sight}
 意図した意味：「ハンサムな顔の若い男」
- b. Don't let his {appearance / *sight} fool you.
 意図した意味：「彼の見た目に騙されないようにね」

ひょっとすると以下の英英辞典を見ると、見た目のことを sight という語で指すのはそれなりに一般的なことなのではないかと思われるかもしれない。名詞 sight の意味 (の 1 つ) を (9a) のように記述したうえで、この意味の sight の具体的な現れの 1 つとして [S know O by sight] の例文を挙げているのである。

- (9) a. something that is in someone's view
 人の視界に入っているもの
- b. *The flowers at the annual flower show were a beautiful sight.*
 年一度の花の品評会で展示されている花々は実に目に美しいものであった。
- c. **by sight** "*Do you know David Wilson?*" "*I haven't met him, but I know him by sight (= I recognize him, but do not know him).*"
 「デイヴィッド・ウィルソンを知っていますか」「会ったことはないのですが、顔はわかります」
 (https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/sight ; 日本語訳は引用者、太字と斜体は原文)

しかし、(9a) (9b) は sight が「視界に入っているもの」を広く指すとする記述・例文となっており、これをもって sight に「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」という狭い意味——(9a) の下位概念にあたる意味——を認めていることにはならないだろう。何よりこの辞書の項目執筆者や編集者も (8) のように sight を使うのが不自然であることは認めるはずである。したが

って、日本語話者が「花見」の「花」とそれ以外の表現における「花」の間に「花見」限定の下位⇔上位関係を見いだしているのと同じように、[S know O by sight] の sight を「(誰か・何かの持っている属性としての) 見た目」と解釈している英語話者は、[S know O by sight] の sight の意味と、(9a) の「視界に入っているもの」義の間に、[S know O by sight] 限定の下位⇔上位関係を見いだしているのだということになる。

3.2. sight に対する解釈②

「見た目」の意味で sight が使われることが（上記のように解釈した場合の [S know O by sight] を除いて）稀であることを考えると、[S know O by sight] の sight を O の見た目のことと考えていない話者がいてもおかしくない。たとえばこの sight を「視覚（的能力）、（比喩的に）目」と解釈している話者がいてもおかしくない。実際、by sight を「視覚（的能力）、（比喩的に）目により」の意味で用いるのはかなりの程度慣習化している。

- (10) a. Sadly, the neural toolkit of human beings doesn't seem to include the capacity for reading sound waves **by sight**. (Steven Johnson, *How We Got to Now*)

あいにく、人間の脳の道具箱には、音波を目で読み取る能力は入っていないようだ。

- b. [状況説明] hound という名詞の定義・説明。

any of various kinds of dog that have been bred to hunt **by sight** or smell

(John K. Bollard, *Scholastic Children's Thesaurus*)

目または鼻を使って狩りをするように訓練された種類の犬を広く指します⁹⁾

さらには、[S know O by sight] の sight を「見る」という行為として捉えている話者もいると思われる。実際、*Oxford Collocations Dictionary* は I know her by sight (= can recognize her but do not know her very well). という例文を名詞 sight の 'the act of seeing sb/sth' (人/物を見る行為) 義のもとに挙げている。

[S know O by sight] の sight を「視覚(的能力), (比喩的に)目」とする解釈と、「見る」という行為だとする解釈は、もちろん、まったく同じではない。しかし、いずれの場合も、その sight は O ではなく \dot{S} の sight——S の視覚的能力, S による「見る」行為——であるという、言わば根っこ共通点がある。これに対して、「sight = 見た目」とする解釈は、sight を \dot{O} の sight だとする解釈である¹⁰⁾。この解釈と、「sight = 視覚的能力」解釈および「sight = 「見る」行為」解釈の間には、先の言い方を引き継げば、根っこに大きな隔たりがあることになる。こうしたことを踏まえ、「sight = 視覚的能力」解釈と「sight = 「見る」行為」解釈はまとめて sight に対する解釈②として、「sight = 見た目」という解釈 (sight に対する解釈①) と対比させることにする。

3.3. 解釈①と解釈②の優劣

ここであらためて明言しておきたいのだが、解釈①と解釈②は、どちらかが正しくどちらかが間違っているという性質のものではない。sight を①のように解釈しようとして、②のように解釈しようとして、[S know O by sight] というフレーズ全体の意味がわかっていれば、[S know O by sight] を適切に使いこなすことはできるのである。実際、英英辞典の項目執筆者および編集者は [S know O by sight] を適切に使いこなすことができているはずだが、名詞 sight の部分をどのように理解しているかは、すでに見た通り、辞書によって異なっている。現代日本語話者の中には、「けりをつける」の「けり」の部分で、和歌の結びに使われる助動詞「けり」と結びつけて理解している者もいれば、それとは異なりたとえばキックの意味の「けり(蹴り)」と結びつけて理解している者もいるし、いかなる「けり」ともリンクを発見していない話者もいるが、いずれのタイプの話者も「けりをつける」というフレーズ全体の意味は正しく把握しており、適切に使いこなしている。[S know O by sight] に関してこれと同種のことを起こっていると考えべきだろう。なお、sight を①のように解釈している話者と②のように解釈している話者とでは by に対する解釈も異なっているという可能性を検討するべきであるが、これについては5節で詳しく論じることにする。

4. know の意味

小西（編）（1980: 812）が指摘しているように、[S know O by sight] の S know O は「S〈人〉が O〈人 [物, 事]〉をそれと認める；見て [聞いて] それとわかる」の意味の S know O であって「S〈人〉が O〈人〉を直接知っている；O と交際がある」の意味の——要するに「知り合いだ」の意味の——S know O ではない。

ただし、一口に「S〈人〉が O〈人 [物, 事]〉をそれと認める；見て [聞いて] それとわかる」の意味の S know O と言っても、その意味には、動的な意味（動作動詞的な意味）と静的な意味（状態動詞的な意味）の 2 通りがある。

- (11) 「S〈人〉が O〈人 [物, 事]〉をそれと認める；見て [聞いて] それとわかる」の S know O の動／静の 2 通りの意味

動的な意味（動作動詞的な意味）：S の脳が、知覚領域に入ってきた人 [物, 事] を正しく O として認識する。「あの人だ!」「あれだ!」というように知識が活性化する動的な変化を表す¹¹⁾。

静的な意味（状態動詞的な意味）：上のような動的な変化を起こすべき時・機会が来れば起こせる知識・能力を備えている。そのような状態であることを表す。

言語学でも（日本の）英語教育でも、know は状態動詞であること、「知っている」「わかっている」といった静的な意味を持つことが強調されているが、そしてそれ自体はある程度適切なことだと思われるが、しかし know が動作動詞的な意味、動的な意味も持つことは疑いようのない事実である。(11) の動的な意味の例を (12) に示す。

(12) 【(11) の動的な意味の例】

- a. Don't you think I **know** a teddy bear when I see one?¹²⁾

(*Bewitched*, Season 2, Episode 13)

テディベアを見てテディベアだとわからないはずがないだろ。

- b. *But a woman **knows** when her husband is being unfaithful.*¹³⁾

(Nick Bradley, *The Cat and the City*; 斜体は原文, 太字は引用者)

でも女はピンと来てしまうものですよね, 夫が浮気をしていたら。

- c. "How will I **know** her?" "She'll be wearing a red sweater."

(<https://www.britannica.com/dictionary/know>)

「どれがその女性なのか, どうやって判別すればいいんですか?」

「赤のセーターを着てくることになっています」

- d. I would **know** [=recognize] that voice anywhere.

(<https://www.britannica.com/dictionary/know>)

あの声はどこで聞いたって「あ, あいつの声だ」ってわかるね。

(12a) と (12b) では when 節の存在に注目されたい。これらの例における when 節は, それぞれ, 「これはテディベアだ」という認識が起こる時点, 「夫は浮気をしている」とピンと来る時点——いずれも脳が動的な変化を起こす時点——を指定している。(12c) においても, 表現こそされていないが, 「そこに着いたら」など when 節相当の内容が隠れていると考えられる。というのもこの例文は, たとえば, すぐに駅前に行ってある女性を探すように言われた話し手が, あらかじめ女性の特徴を教えてもらっていない限り当該の女性を前にしても「お, これが問題の女性だな」と認識しようがないので, How will I know her? と質問している, というような状況が喚起される例文だからである。この状況的理解のもとで, know her は当該の女性を前にして当該の女性と認識する (ピンと来る) という動的な変化と対応している。(12d) は would に注目して解釈することが肝要である。もしもこの話し手が発話時において所有している能力のことを言っているのであれば, 文を I would know ... ではなく I know ... で始めるはずである (その場合, I know ... の know の意味は静的な意味, 状態動詞

的な意味である)。ここで話し手が would を使っているのは、anywhere の「どこであれ、どこにいるのだとしても」という仮定と連動してのことと考えると自然であろう。そして「どこであれ、どこにいるのだとしても」という仮定と自然なかたちで連動する know の意味は、「あ、あの人だ！」とピンと来るといふ動的な意味である。どこにいても彼の声を知ったら「彼の声だ」とピンと来るといふ状態変化が脳に起こるのである、と言っているのである。(12) の例はすべて、「S〈人〉がO〈人 [物, 事]〉をそれと認める；見て [聞いて] それとわかる」の S know O に動作動詞的な意味、動的な意味があることを示している。

しかし、だからといって、「S〈人〉がO〈人 [物, 事]〉をそれと認める；見て [聞いて] それとわかる」の S know O であれば常に動作動詞的な意味、動的な意味が表されているということにはならない。(一般に know が状態動詞であることが強調されていることから予測される通りの) 状態動詞的な意味、静的な意味も、もちろん存在する。(13) に例を示す。

(13) 【(11) の静的な意味の例】

- a. I **know** his face [=his face is familiar to me] but I don't remember his name.

(<https://www.britannica.com/dictionary/know>)

彼の顔はわかりますが、名前は覚えていません。

- b. [状況説明] マクドナルドの客が感謝の気持ちを込めて店員 Amanda を紹介している。

Amanda is an absolute treasure. She **knows** my voice and immediately recognizes me with my specific order.

(<https://www.thankyoucrew.com/fbcontests/profiletab/CMNExt14>)

アマダは本当に宝物のような人です。私の声を覚えていてくれて、「〇〇ください」という私の注文を聞いてすぐに私だと気付いてくれるんです¹⁵⁾。

(13a) を動作動詞的に解釈してしまうと、動作動詞の単純形は常日頃どうであ

るのかを表すのであるから、his faceを見て「あ、あの人だ！」とピンと来るという動的な変化を日常的に経験している、というような解釈をすることになるが、これは(13a)の文意とかなり異なっているように感じられる。これに対して、状態動詞的な解釈、静的な解釈を適用すると、his faceを見て「あ、あの人だ！」とピンと来るという変化を起こせるような能力・知識を持っている状態にある、というふうに解釈することになる。これならば(13a)の文意と合致しているように感じられる。(13b)の[S know O]もやはり静的に解釈したい。というのも、もしも動的な解釈、すなわち「私」の声を聞いて「私」の声だとピンと来るという動的な変化を常日頃から起こしているという解釈を適用してしまうと、後続するand immediately recognizes meとの意味的な重複があまりにも大きくなってしまふからである(このrecognizeは、immediatelyによる修飾を受けていることから、「ピンと来る」という動的な変化、meに関する知識が脳内で活性化していない状態から活性化している状態になるという動的な変化を表している」と解釈するほかないことに注意)。(13b)の英文はこうした重複の印象を与えるものではない。このshe knows my voiceは、「私」の声を聞いて「私」の声だとピンと来るという動的な変化を起こせる知識・能力を持っている状態であることを表しているのだ、と解釈するべきである。

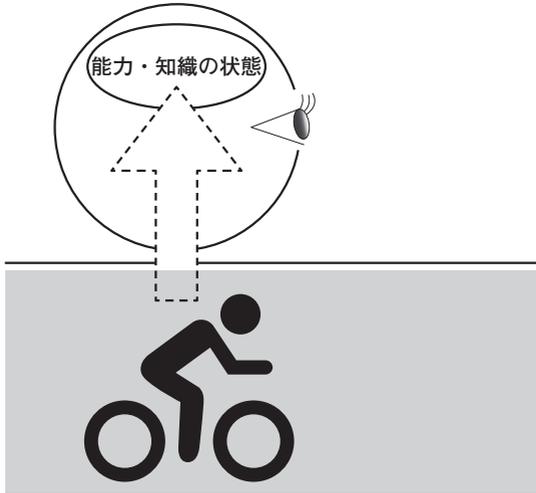
このように「S〈人〉がO〈人[物、事]〉をそれと認める；見て[聞いて]それとわかる」のS know Oに動的な意味と静的な意味があるといっても、この2つの意味は、すでに(11)に示してあるように、後者が前者を前提として含むというかたちで密接に結びついていることに注意されたい。状態動詞的な[S know O]は、動作動詞的な[S know O]を起こせる状態を指すのである¹⁶⁾。この意味的な前提関係あるいは複層性は(14)のような図式で示すとわかりやすいかもしれない。

(14) S [静的 [know 動的 O]]

こうした動的意味と静的意味の同居——動的意味が静的意味の一步奥まったところに前提として潜伏するというかたちでの同居——は、行為の能力の所有

を描写する「…することができる」型の表現にも見られる、非常に一般的なものである¹⁷⁾。たとえば「(うちの息子はもう) 自転車に乗れる」という表現の意味は次のように図示できよう。

図6 「自転車に乗れる」の意味



まず、「自転車に乗れる」というのは能力・知識の状態を指す表現である。このことを示しているのが図6の上半分である。一方、下半分は、自転車に乗って移動するという運動を描いている。この下半分から上半分に向かう点線の矢印は、この運動を起こそうと思えば起こすことができるという関係を表している。この矢印が点線で描かれていること、および、下半分が灰色のレイヤーで塗られていることは、当該の運動はあくまで潜在的なものであること、すなわち、「自転車に乗れる」という表現によって描き出されている時点において当該の人物が自転車に乗って移動している必要はないこと（以下の(15)を参照)を反映している。

(15) 今ここで昼寝しているうちの息子はもう自転車に乗れるんだよ。

remember に動的な意味と静的な意味があることはよく知られている。remember のこの2つの意味の関係は、上記の know の2つの意味の関係と同じだと言える。というのも、「覚えている」という静的な状態は、必要になったときに「思い出す」という動的な変化を起こすことができる状態、その準備が整っている状態のことだからである。やはり静的な意味が動的な意味を前提としている。以下の(16)は動的な意味(動作動詞的な意味)、(17)は静的な意味(状態動詞的な意味)の remember の使用例である。

- (16) She racked her brains, trying to **remember** exactly what she had said.

(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/american_english/rack_2)

彼女は、自分が正確には何と発言したのかを思い出すべく、必死に記憶を遡った。

- (17) Do you **remember** what his phone number is?

彼の電話番号を覚えていますか

(『ランダムハウス英和大辞典』第2版, s.v. *remember*; 日本語訳は原文, 太字と下線は引用者)

remember ほど知られていないかもしれないが、recognize 「Aを見て(聞いて, etc.) Aだとわかる」にも動的な意味と静的な意味がある。より具体的には、対象を自分の知っている何かとしてみなす認識が脳内で活性化していない状態から活性化している状態へと変化するという動的な意味と、そのような変化を起こすべき状況に置かれれば起こすことができる能力を備えているという静的な意味があるのである。やはり後者は前者を意味の一部として含んでいる(そうしたかたちでの前提関係が成り立っている)。以下の(18)は動的な変化の recognize, (19)は能力の所有という静的な意味の recognize の使用例である。

- (18) Amanda is an absolute treasure. She knows my voice and immediately **recognizes** me with my specific order. (= (13b))

- (19) [状況説明] 兄または弟を殺された女性に刑事 Jake が「面通し」を行

っている。

So, do you **recognize** any of these men?

(*Brooklyn Nine-Nine*, Season 5, Episode 17)

それでは、この中に「この人だ」という男はいますか。

それでは、[S know O by sight] の know は (by sight が後続しない [S know O] と同様に) 動的な用法と静的な用法の両方を持つのだろうか。そうではない。静的な意味の方のみが慣習化しており、動的な意味で [S know O by sight] を使おうとすると不自然に響く。(20) を (21) と比較されたい。

(20) ?? When she came in, I immediately **knew** that girl **by sight**.

意図した文意：その少女が入ってきたとき、顔を見てすぐさま「あの子だ」とわかった。

(21) [...] **by** the sunshine on the floor Laura **knew** it was almost noon.

(*Laura Ingalls Wilder, Little House on the Prairie*)

[...] ローラは、床に照りつける太陽を見て、もうすぐ正午だとわかりました。

(21) では、床に照りつける太陽を見て、もうすぐ正午だとわかった——わかっていなかった状態からわかっている状態へと変化した——ということが表現されている。動詞 know の動的な使い方である。(20) は、こうした動的な know が [S know O by sight] の場合には不自然になることを示している (この例では immediately の存在により know が動的にしか解釈できなくなっていることに注意)。したがって、[S know O by sight] の慣習的な意味は、見た目を見て「この人は○○の人だ」とピンと来るという動的な変化それ自体ではなく、そのような変化を起こせるような知識・能力を備えた状態として記述されなければならない¹⁸⁾。

以上の議論を踏まえ、[S know O by sight] の意味を特に know の意味に注目するかたちで図示すると、以下ようになる (ただし、直感的なわかりやすさを

優先して、Oが人間であるケースに限定して図示している)。

図7 [S know O by sight] の意味 (ただし O が人間の場合)

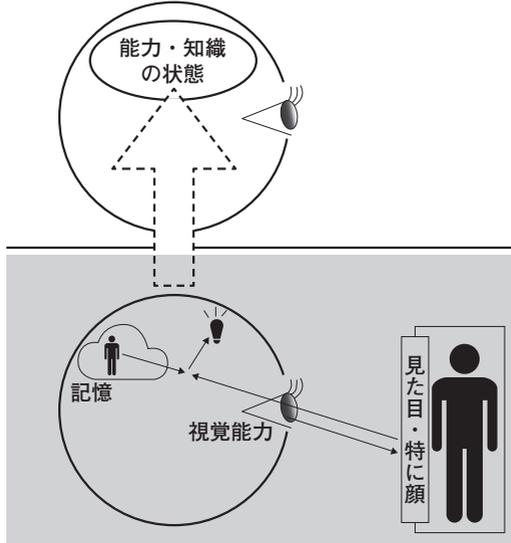


図6と同様, [S know O by sight] の指示対象たる静的な意味(状態動詞的な意味)は上半分で表されている。下半分は, その静的な意味の前提として潜んでいる動的な変化——「ああ, これはよく駅前コンビニでクリームパンを買っている人だ」などとピンと来るという脳の活性化——を表している。上半分と下半分をつなぐ矢印が点線で描かれていること, および下半分が灰色のレイヤーで覆われていることは, 動的な変化の意味はあくまで静的な状態の意味に潜んでいるものであることの反映である。下半分の図で, 認識主体となる人間Sから認識対象Oに向かって伸びている矢印は, SからOへの「見る」という行為を表し, 逆に認識対象から認識主体へ伸びている矢印は認識主体の視覚へのインプットを表す。この双方向的な関係はありとあらゆる知覚現象において成り立つものである。認識主体への矢印はさらに伸び, 「記憶」からの矢印と衝突するように描かれているが, これは認識主体Sの記憶の中にある何らかの視覚的記憶と認識対象Oの像が照合されるプロセスを表している。この衝突

した矢印は角度を変えて、光る豆電球へと伸びているが、これは、照合の結果「同一である」という判断が脳により下される——「ああ、これはよく駅前のコンビニでクリームパンを買っている人だ」などとピンと来る——という動的な変化を表している。[S know O by sight] の静的な意味に潜む動的な意味は、まさにこの衝突から豆電球に向かう矢印と対応するということである。

5. by の意味

本節では、[S know O by sight] における by の意味について議論する。論理を明確化するために、3節で指摘した通り大きく分けて2通り存在する sight 解釈のうちまずは解釈①に話を限定したい。すなわち考察の対象を「sight = O の見た目」という解釈を取っている話者の頭の中に絞り、そうした話者が by をどのように解釈していると考えられるかを議論していく、ということである。その後、sight に関するもう一方の解釈（解釈②）を取っている話者が by をどのように解釈していると考えられるかを論じる。

5.1. sight の解釈①と by の解釈

上で宣言したように、これからしばらくは、「sight = O の見た目」という解釈①のもとの [S know O by sight] について論じていくのであるが、簡便のため、これを [S know O by sight_{見た目}] と表記することにする。さて、[S know O by sight_{見た目}] の by の意味の分析の仕方に関しては、大きく分けて2つの立場が存在している。1つは、この by は〈手段〉を導く働きをしているとするもので、井上（編）（1960: 226）はこの立場を取っていると言うことがおそらく可能である。by rail や by word of mouth, by ear といった明らかに〈手段〉概念と結びついているフレーズと同種のものとして、by sight を挙げている。

一方、[S know O by sight_{見た目}] の by は〈手段〉を導いているのではないとする立場が存在する。たとえば小西（編）（2001: 1100）は、by name に「名前を用いて；名指しで」と「名前（に関して）は」という2つの異なる意味があるとした上で、後者の意味の by name は I know him by name, but not by sight. とい

う例において by sight と対比されていると述べている。となると小西（編）は by sight を「見た目を用いて」という〈手段〉の意味ではなく「見た目（に関して）は」の意味であると解釈していると考えるのが自然だろう。また、『ウィズダム英和辞典』（第4版, s.v. *by*）は know the singer by name [sight] 「その歌手の名前〔顔〕は知っている」という例文を by の〈関係〉義のもとに挙げ、by の訳語の候補として「…（の点）では、…については」を提案している。[S know O by sight] をこのように扱う英和辞典は他にも『オーレックス英和辞典』『ランダムハウス英和大辞典』など多く存在している¹⁹⁾。

筆者の調べた限り、[S know O by sight_{見た目}] の by の意味をめぐる2つの立場のうち、優勢なのはどちらかといえば後者——つまりこの by は「…に関しては、…の点では」ほどの意味であり「…することによって」という〈手段〉の意味ではないという立場——であるようだ。[S know O by sight_{見た目}] の by を〈手段〉義に分類することに抵抗を覚えるのはもっともなことである。というのも、〈手段〉という概念は原則として〈目標の達成〉という概念とペアをなすものだからである。〈目標の達成〉は、何かが成し遂げられていない状態から成し遂げられている状態への変化を指す動的な概念であるので、4節で見た通り静的な意味に限定される [S know O by sight_{見た目}] を分類するのに〈手段〉という概念は持ち出したくないわけだ²⁰⁾。その点、「…に関しては、…の点では」という訳語を用いながら [S know O by sight_{見た目}] の by の意味を特徴づけるのは適切であるようにたしかに思われる。

しかし、だからといって、〈手段〉の概念およびそれとペアになる〈目標の達成〉の概念がまったく関与していないと考えるのは妥当ではない²¹⁾。繰り返すが、[S know O by sight_{見た目}] の静的な意味には、見た目を見て「これはOだ」と認識するという——平たく言えば「わかる」「ピンと来る」という——動的な意味が前提として（図7に即して言えば灰色のレイヤーの背後に、(14)に即して言えば一番内側の [] の中に）隠れている。人間は、起きている限りほぼ常に、自らを取り囲んでいる人・物が誰・何であるのかをわかりたいと思い、わかろうとして頭を働かせている生き物である。それがわかった瞬間は、ある種の〈目標が達成された〉瞬間であり、そのような変化が起こった瞬間だと

うことができる。そしてその「わかる」という変化を可能にするのが、[S know O by sight 見た目] の場合には sight 「(O の) 見た目」なのである。このように〈目標の達成〉を可能にしている以上、by sight という要素は〈手段〉とラベル付けされるに十分値するであろう。

こうした考え方では、[S know O by sight 見た目] において by sight が特徴づけている（修飾している）のは S know O の指示対象たる静的な意味ではなく、比喩的に言えばその一段奥まったところにある動的な意味であるということになる。このように、指示対象それ自体ではなく、その背景に潜んでいる要素に対して修飾がかかるというのは、言語においてごく自然なことである。たとえば a red pen という表現が、試験の採点で教員が用いることが多いあの種のペンを指す場合に、形容詞 red が特徴づけている（修飾している）のは、pen の指示対象たるペン全体ではなく、その一部として含まれているインク部分である。また別の例として、[状態変化表現 + forever] というパターンを考えて見よう。[状態変化表現] の部分にはまさに変化を表す change が現れることが多いが、様々な状態変化表現が使われうる。

- (22) a. [状況説明] 話し手が経験した火事について。

In the course of one night, our lives were **changed forever**.

(Mitch Albom, *The Five People You Meet in Heaven*)

一夜のうちに、私たちの暮らしは元通りになることのない大きな変化を被った。

- b. How can we just **erase them forever**? (*The 100*, Season 6, Episode 6)

どうしたら永久に消去されたままにできるの？

- c. It would be years yet before I realized that my dear brother had burnt up the best of his strength in that one race and its aftermath—**burnt it forever**. He'd never be whole again. (Reynolds Price, *Roxanna Slade*)

数年後にやっと気づくことになるのだが、私の大事な弟はこの1回の競争とその余波の中で、持てる限りの力を使い果たして——取り返しがつかないほど使い果たして——しまったのだ。彼の元

気はもう二度と戻ってこない。

この「状態変化表現 + forever」というパターンにおいて forever が特徴づけている（修飾している）のは、状態変化のプロセスそれ自体ではなく（それだと状態変化に永遠の時間を要するという意味になってしまう）、変化の結果状態ないしその持続である。変化の結果状態（たとえば (22a) なら変化後の生活様式）が永遠に持続するということである。ここで重要なのは、果たして forever が特徴づけている（修飾している）「変化の結果状態ないしその持続」は、「状態変化表現 + forever」において明示的に表現されているかということである。答えはもちろん否である。「状態変化表現」の部分の指示対象はあくまで状態変化のプロセスそれ自体であって、結果状態やその持続ではない。しかし、状態変化のプロセスという概念——仮に状態 α から状態 β への変化としよう——には状態 β の持続という概念が潜んでいる。たとえば何かの事件をきっかけに人の性格が変わってしまったなどと言う場合、変化後の性格 β がある程度の期間持続しているということが、話し手にとっても聞き手にとっても暗黙の前提として理解されることになる（性格 β にまったく持続期間がないのに性格 α から性格 β への変化を語ろうとすることはありえないし、まったく持続期間がないならそもそも性格 β の存在を把握することもできないだろう）。このように暗黙の前提として存在している変化後の状態が forever で特徴づけられるのが「状態変化表現 + forever」なのである²²。

このように、概念構造の中で一歩奥まったところに存在している要素への特徴づけ（修飾）という現象を自然なものとして認めるならば、「S know O by sight 見た目」に関しても、by sight が特徴づけている（修飾している）のは、静的な状態という「S know O」の指示対象的な意味の前提部分に潜んでいる、「誰・何であるかを知る」という動的な〈目標の達成〉であり、したがって by sight はその〈目標〉に対する〈手段〉に対応しているのだという考え方も、自然なものとして受け入れられよう。結局のところ、「S know O by sight 見た目」の by sight は、(23a) のように「S know O」の指示対象たる静的意味を特徴づけて（修飾して）「見た目に関しては、見た目の点では」ほどの意味を担ってい

ると考えることも、(23b) のように静的意味の前提として含まれている動的意味を特徴づけて(修飾して)「見た目によって」という〈手段〉の意味を担っているとも考えられるのである。

- (23) a. S [[静的 [know 動的 O]] by 「…の点では」 sight 見た目]
 b. S [静的 [know 動的 O by 手段 sight 見た目]]

したがって、[S know O by sight 見た目] の by に関して現在存在している2つの立場のうち、片方が正しく片方が間違っていると考えることは、真実を歪めることになってしまう。

5.2. sight の解釈②と by の解釈

ここまでは、[S know O by sight] の sight を O の「見た目」と解釈している話者について考えてきたが、ここで、解釈②サイドの話者、つまり、sight を S の「視覚(的能力)、(比喩的に)目」あるいは S による「見る」という行為と解釈している話者について考えることにしよう。こうした話者は by を〈手段〉義で解釈していると考えられる。その理由を以下に述べる。

ひとまず実験的に、このようなパーツ解釈に基づいて [S know O by sight] 全体の意味を組み立ててみると、次のようになる。

- (24) 「sight = S の視覚あるいは S の「見る」行為；by = 〈手段〉義」というパーツ解釈から予測される [S know O by sight] 全体の意味：
 「視覚(的能力)、(比喩的に)目」あるいは「見る」という行為が〈手段〉として活躍して、O を見て正しく O と認識するという〈目標〉を達成する。このような認識事象を引き起こすことができる能力・知識を備えた状態に S はある

この「予測される意味」は [S know O by sight] の実際の意味を適切に記述したものになっている。したがって、このようなパーツ解釈は母語話者が実際に

行っている解釈の1つであると考えられる。

一方, by を「…に関しては, …の点では」の意味と解釈するとどうなるか。このパーツ解釈から予測される [S know O by sight] 全体の意味は, たとえば「視覚あるいは「見る」という行為の点では S は O を知っている」などとなり, [S know O by sight] の実際の意味からかなり離れたものとなってしまう(このいささか不可思議な意味と実際の意味とを何らかのかたちで結びつける余計なプロセスが必要になってしまう)。by を〈手段〉義と解釈すればこうした問題が発生しないのに, わざわざそれをスキップして「…に関しては, …の点では」と解釈する話者はおそらくいないだろう。こうした解釈をしている話者がいるはずだと考えるのが不自然であるのは, たとえば, cut paper with a pair of scissors という表現全体の意味を正しく理解できている話者の中に, with を〈道具〉義(～を使って)ではなく〈関連〉義(～に関して)と解釈している人(その上で「はさみに関して紙を切る」といういささか不可思議な意味と「はさみで紙を切る」という実際の意味とを何らかのかたちで結びつけている人)がいるはずだ, と考えることが不自然であるのと全く同様である。

6. 結語

以上の議論をまとめると, [S know O by sight] というフレーズが実際に持っている意味を正しく理解しこのフレーズを使いこなしている話者が, know, by, sight というパーツについてどのような解釈をしているかには(少なくとも)以下の3通りがありえるということになる。

- (25) a. S [[静的 [know 動的 O]] by 「…の点では」 sight 見た目] (5.1 節前半)
 b. S [静的 [know 動的 O by 手段 sight 見た目]] (5.1 節後半)
 c. S [静的 [know 動的 O by 手段 sight 視覚・見る行為]] (5.2 節)

この要素分解的解釈のどれを取っても, [S know O by sight] というフレーズ全体の意味を正しく把握することができる。したがって, どの解釈を取っている

話者もいるだろうし (cf. 図 4), たとえば (25a) と (25b) とか, (25a) と (25c) とかいったふうに, 複数の解釈を取っている話者もいるだろう (cf. 図 5)。 (25a) - (25c) のどれが正しくどれが間違っているという問題ではない。

ということは, by に着目して言えば, [S know O by sight] というフレーズの by は〈手段〉義とも非〈手段〉義とも分析できるということである。by が〈手段〉義を担っているのかいないのかについて論者の意見が分かれうる表現は [S know O by sight] の他にも数多く存在すると思われる (たとえば by day 「日中」など)。そうした表現を分析する際にも, 〈手段〉であるのかないのかという二項対立にとらわれず, by というパーツ以外に関して複数の解釈, 複数のリンク発見のあり方が存在する可能性はないか, それに連動して by が〈手段〉であるとも〈手段〉でないとも解釈できる可能性はないか, 検討する必要がある²³⁾。本稿が〈手段〉か非〈手段〉かという安易な二項対立を前提とすることの危険性を認識する一助になれば幸いである。

なお, 注 19) でも触れたが, 本稿には平沢 (近刊) という続編が存在する。by の「…に関しては, …の点では」の意味の詳細, およびこれら 2 本の論文の細部・全体の理論的な位置付けなどについて論じている。ぜひご一読願いたい。

- * 本稿は慶應義塾大学 2024 年度講義「前置詞研究」の内容の一部をまとめたものである。適切な質問やコメント, 修正案を寄せてくださった磯部傑貴君, 伊野波盛彦君, 澤永拓哉君, 中岸岳也君に感謝したい。原稿に関して助言をくださった西村義樹先生, 松田俊介氏, 野中大輔氏, 萩澤大輝氏, 山崎竜成氏にもこの場を借りて感謝を申し上げる。なお, 本研究は, 慶應義塾学事振興資金 (2024 年度) の補助を受けて行われたものである。

注

- 1) 「何の変哲もない」の意味から「何の」の意味と「もない」の意味を引き算することにより, 「変哲」の意味を言える話者というのはもちろん存在するだろう。ここで存在を否定しているのはそのような理解の仕方ではなく, 「何の変哲もない」以外の「変哲」フレーズと「何の変哲もない」の間に「変哲」リンクを見いだすような理解の仕方である。

- また、「変哲」よりもマイクロな「変」というパーツと、「異変」や「何それ、変なの！」などにおける「変」との間にはリンクを発見している話者は多いと考えられる。そのような理解の仕方もちまた、ここで否定しているものとは異なる。
- 2) ある表現が上位概念を指す用法と下位概念を指す用法を併せ持つ現象は、シネクドキ (synecdoche) と呼ばれる極めて一般的な現象の一種で、「花」以外の例としては、日本語の「ご飯」や英語の bread が米・パンという下位概念も、食べ物という上位概念も指せることなどが挙げられる。
 - 3) 「けりをつける」というフレーズを適切に使いこなしている人の中に、この「けり」を「蹴り」そのものとして認識している人はいないだろう。ここで想定しているのはそのような人ではなく、「けり」に「蹴り」の持つ勢いのようなものを読み込んでおり、「けりをつける」を使用する際に (いつもとまではいかずとも) 蹴り動作のイメージが頭にうっすらと浮かぶことがあるような人である。
 - 4) 注3) で述べたのと同様、ここで想定しているのは、「けりをつける」の「けり」を助動詞の「けり」そのものとして認識しているような人ではない。
 - 5) 萩澤 (2023) の「置いてけぼり」の「ぼり」に関する指摘も参照。
 - 6) 以下、断りのない限り、例文中の太字と下線による強調および日本語訳は筆者によるもの。
 - 7) これは face が「(…な) 顔」に加えて「(…な) 顔を持つ人」を表すこともできる (e.g. She's not just a pretty face.) ことと関連している。Lakoff and Johnson (1980: 37) の議論を参照。
 - 8) 類似の現象として、by design 「故意に、わざと」という慣習的な表現において design が担っていると思われる「故意」の意味は、by design 以外の design 表現には (ほぼ) 見られないということが挙げられる。そして、興味深いことに、by design は by accident 「偶然に」などと対比されて用いられることが多い。以上の指摘は野中大輔氏 (私信) による。
 - 9) 子ども用の辞書であることを考慮して、「視覚」「嗅覚」「狩猟」ではなく「目」「鼻」「狩り」と訳している。なお、筆者は「誰向けの言葉なのか」もことばの意味の一面であるとみなす理論的立場を取っている。
 - 10) sight の主体が異なる複数の解釈を認めるなど非現実的だと思われる向きがあるかもしれないが、こうした現象は日本語にも見られる。「猫撫で声」における「声」の主は撫でる側だろうか、それとも撫でられる側だろうか。いずれも無理のない解釈であると思われる。以上は萩澤大輝氏の指摘 (私信) による。
 - 11) 知らない状態から知っている状態への変化 (日本語で言うと「知る」に相当する変化) ではないことにくれぐれも注意されたい。
 - 12) [know + 不定名詞句 + when + 人 + see + one] 「…を前にしているとき、…を前

にしているのだとちゃんとわかる」は慣習化したパターンである。

- (i) I think I **know** a lost cause **when I see one**.

(映画 *Harry Potter and the Half-Blood Prince*)

どうやら私は見込みがないときにはちゃんとそれがわかるようだな。

- (ii) [...] I want you to know we here **know** a good sort **when we see one**.

(Kazuo Ishiguro, *The Unconsoled*)

[...] ここにいる者は一目で立派な人物を見抜く力があることを、分かっていただきたいのです。
(古賀林幸 (訳) 『充たされざる者』)

- 13) [know when SV] 「SV のとき, SV なのだわかる」も慣習化している。

- (i) I just **know when** I'm outclassed. (Columbo, Season 1, Episode 6)

勝ち目がないときは薄々わかってしまうのさ。

- (ii) Leosa: [...] and I **know when** somebody's bluffing.

Deanna: Try me. (Star Trek: Voyager, Season 7, Episode 6)

リオーサ: [...] はったりなら見抜けるわよ。

ディアナ: それはどうかな。

- 14) 現在はページが更新され全文の閲覧はできなくなっているが, Google 検索では依然としてヒットする (2024年6月20日現在)。

- 15) specific という非セリフ的な英語表現を「○○ください」というセリフ的な日本語表現に翻訳しているが, こうした訳し方が有効であるケースは specific に限らず多くある。詳しくは平沢・野中 (近刊: 4.5 節) を参照。

- 16) ただし本稿はこの逆の見方——すなわち動作動詞的な [S know O] は状態動詞的な [S know O] により表される知識・能力を実際に発揮することを指すのだという見方——を否定するものではない。この見方について本文で触れていないのは, 本稿の主たる研究対象である [S know O by sight] は静的な用法でのみ慣習化している (動作動詞的な用法は慣習化していない) からである。例 (20) の説明を参照。

- 17) もっと言えば, 能力・知識に限らず, 人間が静的な状態について語る時, そこには動的な変化という概念が多かれ少なかれ関与していることが多い。たとえば, The kitten is in the box. という静的位置を語る文を発話する話者は, 当該の猫を「見つける」ことや猫がどうやってその箱に「入って」しまったのかということに関心を持っているだろう。この「見つける」「入る」は言うまでもなく動的なプロセスである。こうした動的な関心がまったくなく静的な位置を語る文を発話する状況というのは, たとえば学校の地理の授業で Cleveland is in Ohio. という場合などに限られるであろう。これらの例および例に対する説明, さらに静に潜む動という概念については Langacker (2009) を参照。

- 18) (20) の評価はインフォーマント（アメリカ英語母語話者）による。ただし、現代アメリカ英語コーパスである The Corpus of Contemporary American English (COCA) で検索すると（平沢近刊）, [S know O by sight] が見た目を見て「この人は○○の人だ」とピンと来るという動的な変化を表している実例が、少数ながら見つかる。
- 19) by が持つ「…に関しては、…の点では」の意味とは、より具体的にはどのようなものだろうか。これはとても興味深い問題であり、本稿の続編とも言える平沢（近刊）で詳細に論じている。
- 20) 正確には、4 節で論じたのは [S know O by sight] であって [S know O by sight 見た目] ではないが、[S know O by sight] の意味が静的なものにほぼ限定されるということは、[S know O by sight 見た目] の意味もまた静的なものにほぼ限定されることになる。
- 21) 分析の仕方を必ずしも 1 通りに限定しない姿勢については平沢（近刊）の結論を参照。
- 22) forever に加えて、「永遠に」を表す for good というイディオムの多くの用例についても、同じことが言える。
- (i) This time she's leaving **for good** (= she will never return).
(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/good_2#good_idmg_10)
彼女、今度ばかりはもう戻ってこないよ。
- (ii) I'm going to kick the habit **for good**.
(<https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/for-good>)
（麻薬やタバコなどについて）やめて金輪際手を出さないようにするよ。
- 23) 本稿において by に対する慎重な解釈が可能になっているのは、特に、know の意味を詳しく記述したことによる。平沢（2019）からは、by の意味を知っているということの重要な一部に、by 以外の表現の意味をよく知っていることが含まれるとの示唆が得られるが、本稿もそれに与するものと言える。

参考文献

- 萩澤大輝（2023）「言葉とはどういうものか寄り道しながら考える」『知識の狩人：学問の世界の学びへの誘い』197-200.
- 萩澤大輝・氏家啓吾（2022）「リンク発見ゲームの諸相：「記号が存在する」というフィクションを超えて」『東京大学言語学論集』44: 1-18.
- 平沢慎也（2019）『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』東京：くろしお出版.
- 平沢慎也（2021）『実例が語る前置詞』東京：くろしお出版.

- 平沢慎也（近刊）「〈他面意識〉から考える S know O by sight の意味：by nature や by trade との接点」『日吉紀要 英語英米文学』81.
- 平沢慎也・野中大輔（近刊）『実例から眺める「豊かな文法」の世界：ことばのありのまま向き合う英語学習』東京：大修館書店.
- 井上義昌（編）（1960）『英米語用法辞典』東京：開拓社.
- 小西友七（編）（1980）『英語基本動詞辞典』東京：研究社.
- 小西友七（編）（2001）『英語基本名詞辞典』東京：研究社.
- Lakoff, George and Mark Johnson（1980）*Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W.（2009）Reflections on the functional characterization of spatial prepositions. *Belgrade English Language & Literature Studies* 1: 9-34.
- 野中大輔（2021）「「何の変哲もない」の「変哲」って？」 Available online at <https://note.com/dnonaka/n/n22a61b56b5d0>

コーパス

- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

辞書 [物書堂アプリ版]

- 『ウィズダム英和辞典』（第4版）三省堂.
- 『オーレックス英和辞典』（第2版）旺文社.
- 『ランダムハウス英和大辞典』（第2版）小学館.
- 『コンパスローズ英和辞典』研究社.
- 『ジーニアス英和辞典』（第6版）大修館書店.